『落語と私』感想

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　s14778mm 松本倫明

　ゴールデンウィーク期間中、大阪の繁盛亭で桂枝三郎さんの落語を聞いた。枕の部分でオウム真理教の話をして、笑いをとっていたことが印象的だ。前代未聞のテロ事件をネタにするのはタブーなことのように思える。しかしそれが笑いとして許されるのが落語の特徴なのだろう。桂米朝さんは『落語と私』の中でとても印象的なことを書いている。

|  |
| --- |
| 最後はかならず、笑いの衣にくるんでケリをつけてこそ芸人といえましょう(P158) |

タブーが落語の中で許されるのは、長年、噺家をつとめ、腕を磨き、笑いに変える技術を身につけたからなのだろう。

　この引用文が書かれている第三章で、噺家がお客さんとほのぼのとした交流を行うことも記されている。この交流も落語独特の楽しみだろう。歌舞伎や能、文楽では筋書きに従った演劇が行われ、お客さんを魅了する。浄瑠璃では、人間の豊かな感情が人形の表情や仕草に、見事に表現されて、日本の素晴らしい芸能の技術を感じる。一方、落語は寄席の場によって常に変化するのがまた面白い。著者である桂米朝は「地獄八景亡者戯」の中で、閻魔大王のまねをした後、「顔がしばらく戻らないんです」と告白して笑いをとっている。さらに米朝は「これから笑いを取ってやるぞ」という時に眉を上下に動かす、ということを米朝の弟子である枝三郎さんから聞いた。「よし、笑わせるぞ」と思った米朝が眉毛を動かしたのを見て、お客さんは「お、来るな」と期待する。そして期待した通りに米朝が笑いどころを提供して、お客もどっと笑う。落語家とお客さんとの間で行われるやり取りが笑いを作り出しているとも言えるだろう。

　エピローグの部分では、落語に登場する人物の人柄が記されている。人間らしく矛盾を抱えた人々は、どこの世にもいる当たり前の存在であるが、多くの人から好まれる。着物と洋服の違いを抱える時代にあっても、この登場人物の当たり前さがどの時代にあっても変わらない面白さを落語に与えているのかもしれない。どの時代にあっても面白いという特徴がありながら、寄席ごとに変化が起こる。落語自身が抱えているこの矛盾がやはり魅力的だ。